

《題目》Tea Time の準備は交代制

今では、女性社員が 10 時や 3 時にお茶を入れることが当たり前の会社は少なくなっていると思いますが、私がブリストルに入社したのは、40 年以上前（昭和 52 年）頃は、多くの職場で、お茶入れは女性社員の仕事であったように思います。

当時のブリストル・マイヤーズ社には 3 つの事業部があり、他の事業部の状況は全く知りませんが、少なくともバイオケミカル事業部では、全ての部署で、①好きな時に自分で用意する、②日に 1 回の定刻には、男女の区別なく、その日ごとに決められた担当者が用意することになっていました。但し、係長以上の管理職はしませんでした。コーヒーにするのか、紅茶か、緑茶か、などを、その都度聞いて用意し、全員分が用意できたところで声を掛ける。血液は尿などあらゆる体液をサンプルとしていたので、分析室の端っこの専用スペースで、用意する前に消毒もしていました。

ですから、先輩後輩の別なく、また、男女の別もありませんでした。「これが外資系のやり方なのか」と感心したことを覚えています。しかし、女子社員の方が多いのに、管理職は、殆ど男性でした。米国本社や欧州の支社では女性管理職も多いとのことでしたが、日本法人では、殆ど見ませんでした。数名の女性管理職は居ましたが、殆ど結婚していないのです。稀に結婚している人でも、子供は居ませんでした。当時は、保育園などというものは殆ど無く、このように女性と男性を平等に扱っていた会社でも、結婚して子供ができれば、退職していく状況から、女性が管理職になることが出来なかった。これが現実でした。2000 年の長い歴史を持つ日本という国が、長きに渡り、男性優位の社会を保ち、女性参政権や男女雇用機会均等法などが制定されても、未だ、『男は外で働き、女性は家庭を守る』などといった前近代的な考え方が拭い去れないでいます。

最後に、米国では、第一線で活躍し、管理職や役員として働いている女性を多く見ますが、これには、大きなカラクリがあるのです。どのようなカラクリがあるのかは、「Section 03 米国社会の実情と問題点」で書かせて頂きます。今、知りたいからと、メールを頂戴しても、返事をご容赦下さい。